



イケン先生の『恐縮ですが…一言コラム』

第 588 回 母は、本当に幸せだったのか？

2014.8.3

入院先の病院の、若い看護師から電話があった。

「危篤ですか？」

「そういう意味ではないですけど…」と簡単に状況を告げ電話が切れた。

その数分後、今度はベテランの看護師から電話があった。

「こちらに来られますか？何時ごろになりますか？」

「危篤ですか？」

「出来たら顔を見た方が良いと思いますので…」

また「危篤」という言葉は発せられなかったが、尋常でない様子が分かった。

幸い出張がなく、急ぎ駆けつけた。

そこにいた母は、呼吸も、心電図の波も、止まっていた。

看護師の最初の電話から、30分もたっていないこと、携帯電話の履歴が示していた。

大正14年5月生まれだから、満89歳だった。

父が亡くなり、この夏二七回忌の法要をする予定だった。

父が亡くなった直後から、徐々に、母の様子が変わっていった。

「痴呆症です」と言われて、17年ぐらい経過していたと思う。

なるべくそばにいて欲しい…そんな思いから施設に頼らず、自宅で静養する日々が続いた。

家族総出で、おふくろと向き合った。

家内も、姉も、孫達も、良く励んでくれた。

「頑張らない介護」を主張する専門家の言葉を信じてみたが、

家族が頑張らないはずがない事を知った。だから、それも限度があった。

やがてデイサービスに通い、夜は専門のヘルパーさんに付き添って頂き、

24時間体制で母と共に頑張ってきたが、5カ月間の入院の後、あつという間の最期だった。

今日これから、通夜を行う。ここ数日間は、葬儀・告別式の準備等に明け暮れ、

正直、母の死の重みが実感できないでいる。

家族みんなで、精一杯尽くしたつもりになっていた。

病院にも、毎日通って、何も食べず、何も分らない母に、話掛けてきた。

でも、頑張ったというのは我々家族の思いでしかない。

これで良かったのか？ 本当に、母は幸せだったのだろうか？

時間の経過とともに、これから少しずつ、答えが見つかるかもしれない。